

小学校音楽科における器楽学習の可能性

－ ドラムセットを活用して －

Instrumental Music Education in Elementary Schools

－ Use of Drums －

篠原秀夫・徳田典子

Hideo SHINOHARA, Noriko TOKUDA

本研究は、スイングジャズスタイルの楽曲を用いて、友達と協働学習しながら音楽表現をする活動の実践事例である。具体的には、①グループに分かれた子どもたちが、楽曲にあったドラム演奏を創作する活動である。②この協働学習を通して、子どもたちが他者の考え方、感じ方の違いを感じ、自分の考えや感じ方と比較できる力を得たこと。③また、①と②を通して、子どもたちは楽曲の特徴を意識しつつ、自分の表現したい演奏をめざしたこと。

本研究では、④2台のドラムセットを活用した器楽学習の方策の可能性とスイングジャズスタイルの楽曲を使用することの教育的意義について考察をする。

キーワード：器楽学習/ドラムセット/協働学習/スイングジャズスタイル/教育的意義

はじめに

中央教育審議会答申⁽¹⁾に示されている主体的な学びには、学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという4つの視点が示されている。

本研究では、小学校音楽科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の課題を意識する。特に高学年の器楽の活動において、見通しをもって粘り強く取り組むという視点を意識した授業構想の方策を考察する。

新学習指導要領⁽²⁾では、子どもが「いろいろな楽器や曲を演奏することに挑戦したい」と思えるようにすることを大事にしながら、意欲をもって主体的に取り組むことができる器楽の活動を進めることが重要であると示している。

そこで、題材を通して子どもたちがわくわくしながら楽しんで挑戦し、粘り強く器楽の学習に取り組むためには、魅力的な学習材が必要だと考えた。

多田(2018)⁽³⁾によると、感性や感覚・感受性・好奇心・遊び性などの子どもが生来もっているものを存分に発揮させることが子どもたちに内発的モチベーションである興味・関心を喚起させるとある。また、「わくわくした」「驚いた」「面白い」などと感じた体験は、「もっと知りたい」「考えたい」との学びへの意欲を高めると示している。

この研究を実施するにあたり、まず対象の第5学年全員に、学習材とするドラムセットについての意識調査を実施した。子どもには「ドラムの魅力について教えてください」という設問について記述させた。これによると、大きく分けて3点についての回答があった。

1点目は、ドラムセットという楽器についての魅力である。記述によると、ドラムセットに組み合わされている楽器には金属系のものやドラム系のものがあり、1台で大小様々なドラムやシンバル等の打楽器の音が出せるという点である。

2点目は、手足を動かす身体性についてである。両手両足を使い、体全体でリズムを刻む爽

快感はドラムでしか味わえない点である。

3点目は、奏法や楽器の組み合わせを工夫することによって、音色の響きの良さや面白さが音で表現できる点である。その他として、見た目のかっこよさなどが挙げられた。

そこで、子どもが生来もっている感性をより発揮させるために、子どもがわくわくする学習材であるドラムセットを使う。子どものモチベーションを喚起させることで、学びへの意欲を高めていきたいと考えた。

ここでは単に授業の方法論をつくりだすだけでなく、この実践を体験した子ども同士の心が通じ合い、響き合うことをねらう。また、この学習における子ども同士の対立や困難が直面した場合には、相手の心情や思いに響き合うことや乗り越える力、仲間と同じ目標にむかって何かを創り出す力が育まれていく協働学習であってほしいと考える。そこで、グループによる協働学習を通してドラム演奏を共に創り合う器楽学習の方策とした。

本研究では、2台のドラムセットを活用した器楽学習の方策にどのような可能性があるのか、また、スイングジャズスタイルの楽曲を使用することなどの教育的意義について考察する。

1. 「器楽」の実践の概要

本実践は、金沢大学人間社会学域学校教育実践研究附属小学校の第5学年の音楽科の授業において実施したものである。対象の子どもは112名である⁽⁴⁾。

(1) 指導の実際

題材名：ドラムを使って ビートテクニックを磨こう part1
～スイングジャズスタイル「スイングしなきゃ意味がないね」を使って～

○題材のねらい

- ・曲想に合う表現をするためにドラムの奏法を考えて演奏することができる。

(知識・技能)

- ・楽曲の特徴を意識して、まとまりのある音楽をつくるかについて思いや意図をもととする。(思考・判断・表現)
- ・友達と協働しながら音楽表現をする音楽表現をする活動を通して、様々な考え方や感じ方の違いを感知、比較することで、自分たちの表したい表現に気づき、統合して表現しようとする。

(主体的に学習に取り組む態度)

○題材計画：総時数 11 時間＋課外

- 第一次 スイングジャズスタイルの楽曲の特徴や構成をつかむ (3時間)
- 第二次 提示したリズムパターンを基にグループで演奏をまとめる (6時間)
- 第三次 聴き合う活動を取り入れ、まとめの表現をする (2時間)

本実践では、「スイングしなきゃ意味がないね」を教材とし、スイングジャズスタイルのもつ雰囲気を感じさせ、範奏 CD に合わせてドラムセットで演奏させることをねらった。演奏の仕方としては1曲を2台のドラムセットを使って、グループのメンバーが交互奏や分担奏など工夫して演奏する。1グループは12～13名で構成することから、それぞれのグループのメンバーの力量にばらつきが予想される。そのことを踏まえて、演奏順や各グループ内に生じている配慮すべき問題を相談しながらまとめていく協働学習も重要になってくる。また、使用する楽曲のドラムのパート譜に示されている fill in や solo の部分についても、各グループで創意工夫させることにし、活発な話し合いやつくった音を聴きあう場をもちながら演奏をまとめさせる。

2. 授業の実際

本研究の指導の実際は、第5学年の第一次からの実践による実際を抜粋する。

- (1) 第一次：スイングジャズスタイルの楽曲の特徴や構成をつかませる。

①体を動かす活動を取り入れる。

この曲を生き生きと演奏させるために、学

習の初めにスイングする楽しさを体感させる必要があると考えた。新学習指導要領⁽⁶⁾には子どもが音楽全体にわたって感じていくためには、体のあらゆる感覚を使って音楽を捉えていくことが必要となると示している。

そこで、楽曲を聴き取りながら自由に手拍子を入れたり、体を左右にゆらしたりして演奏するスイングジャズスタイルの音楽を体感させたいと考え、体を動かす活動を取り入れることにした。

はじめに今回の器楽学習に使用する「スイングしなきや意味ないね」の範奏 CD の聴き取りをした。

子どもにはこの段階の過程について質問したところ、次のような記述になった⁽⁶⁾。

この曲はいろんな音があっかかりよかったです。特に強弱がついているところが一番聞いてほしいところなのかとよくわかりました。最後に近づいていくと音が大きくなっていく感じが良いです。私はこの曲に引き込まれていって終わるのが悲しいなあ、さみしいなと思えました。こんな引き込まれる曲のドラムをたたきたいと思いました。ディズニーの「スイングしなきや意味ないね」は私たちがこれから演奏するのと旋律は同じでもほとんどちがっていて、今聞いたこの曲もまた別のかかりよさがあり、いいなと思います。最初にも書いた通り、本当にかっこよくて大人な、でも明るい感じがまたかっこよくて、一言で表すと「かっこいい」しか出てこないです。

(A児による感想)

そこで鑑賞をしてから、体を動かす活動に取り組んだ。写真1のA児は、体を動かす活動をとっても楽しんでた。高学年になると人目を気にして体表現が出来ない子どももいるが、この学級ではA児がのびのびと動作する様子を見て、だんだんとA児の周囲に子どもが集まり、一緒に体を動かして表現した。写真1の様子は構成EのsoloからFのリムショットの部分にかけての表現の様子である。特にこの編曲の構成Fでは、スネアドラムのリムショットの演奏が軽快でノリがいい。A児の体表現から見ると、その音楽を聴

き取ってタップダンスをしているようなステップを表現していた。周囲はA児と一緒に踊り、手拍子を入れて自然に体を動かす活動を楽しむ様子がみられた。また、曲のクライマックスとともに手拍子や動作も大きくなり、体をくると回転して楽しんで踊るシーンもみられた。その姿に他の子どもから大きな歓声が上がり、他の子どもも共に音楽に浸りきっていた。新学習指導要領⁽⁷⁾で示されているように、体全体で音楽を感じ取る活動を取り入れることから、より音楽との一体感を味わい曲の特徴を体のあらゆる感覚を通して捉えることにつながっているようにみられた。

A児はこのスイングジャズスタイルの楽曲との出会いに感動していることが感想の記述や体を動かす活動から伺える。また記述の感想からは、強弱の変化など楽曲の表現も深く聴き取っていたことや楽曲と違うアレンジとの比較などもしていた。



写真1 体を動かす活動

②曲を鑑賞して、イメージ画を描かせる。

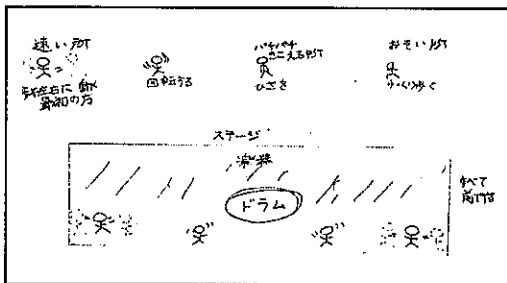
子どもには楽曲の聴き取りをしながら、場面や様子、情景などの具体的なイメージをもったことをより表出させたいと考え、鑑賞をもとに想像したことを簡単なイラスト(棒人間)で描かせた⁽⁶⁾。

B児のイラストからは、じっくりと音楽を聴いて想像力を働かせ、その曲全体がどのよ

うな構造になっているかが表現されている。

例えば、絵にある速いところと示している部分には、体が左右に動く感覚が記述されこの楽曲のスイングする感覚を表している。

また、パチパチと聴こえると示しているところとは、構成の F にむかう部分で、solo でスネアドラムのリムを叩く奏法によるのである。B児は聴こえてくる音からひざを使って打ち鳴らす動作を想像している。最後の遅いところとは coda 部分を示し、エンディングまでにゆっくり歩き、最後の連打の部分に向かうとイメージしている。



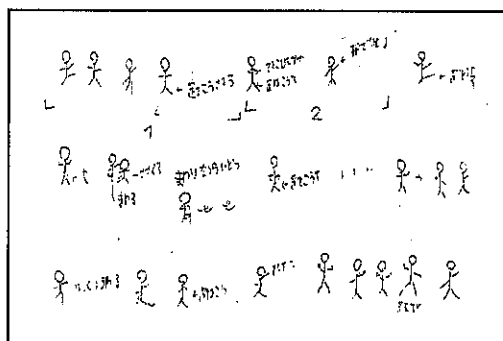
絵1 B児のイラスト

絵2は、①において先に示したA児によるイラストである。

A児のイラストは前奏や solo 後奏などの部分を踊ることをイメージしている。初めに足を交差すると示している部分から始まり、手を腰に付けて足を開いて指を立てるまでの動作を経て、友達とペアになり、その後、また足を交差して横に動き、くるりと回ってから手をあげてポーズする。A児のイラストには、音楽の特徴に合わせた具体的な動きが細かく表現されている。

小島(1999)^⑩は、絵には論理的な部分が描かれその部分が曲を形づくるための枠組であると述べている。

A児にとっては体を動かす活動で思い切り音楽を体感したことで、絵2のように、場面や様子をより具体的なイメージをもって音楽と関わったようにみられた。



絵2 A児のイラスト

(2) 第二次：提示したリズムパターンを基にグループで演奏をまとめさせる。

① 2つのリズムパターンを提示し、この楽曲に必要な技能を習得させる。

新学習指導要領⁽¹⁰⁾によると、器楽の技能習得に当たっては、子どもが表現したい思いや意図をもち、それを実現するためにこれらの技能を習得することの必要性を実感できるようにすることが大切であると示している。



図1 2つのリズムパターン

ここでは、図1のa・bを提示し、範奏CDに合わせてリズムパターンを練習させることにした。5年生にとって初めてのスイングジャズスタイルの演奏であることから、簡易でどの子どもにとっても演奏が楽しめる内容であることが望ましいと考えた。またこの楽曲の編曲の良さが損なわないように、ドラムのパート譜に類似した簡易なパターンを設定することに配慮した。

そこで、初めに図1にあるa・bのパターンを実際にドラムセットで演奏できるように必要な技能を習得させる手立てをとった。

写真2は、学習机をドラムセットと見立てた練習板上でドラムのリズムパターンの練習をする。

ここでは、子どもに図1の2つのパターンを理解させ、定着する時間を与える。



写真2 リズムパターンの動作化

写真2のC児は、aのパターンを練習している。右手はライドシンバル、左手はスネアドラムのパターンをイメージして叩いている。また、右足でベースドラムを左足でハイハットのパターンを徐々に加えていく練習をしている。このような練習を経てa・bパターンの動作が徐々に理解できるようになってきた。次にa・bパターンを音楽に合わせて、練習し始める。また、パターンが上手く理解出来ていない人のためにグループのメンバーが協力して教え合いをしている。この段階から徐々に各グループにおける協働学習が活発になってくる。2台のドラムを使って分担奏するイメージが徐々に定着してくる。写真3は、学級全体で練習板を使って2つのリズムパターンを練習している姿である。2つのパターンの動作が理解できるように練習板でくりかえし練習したのち、ドラムセットで確認するという流れである。ドラムセットで演奏しているD児は練習板では確認できないベースドラムの音色を聴き取りながらリズムパターンを演奏している。



写真3 リズムパターンの練習する姿

②曲の構成を可視化する。

2つのリズムパターンの奏法に関する技能がほぼ理解できるようになった段階で、この楽曲がどのような構成されているかについて理解させることにした。

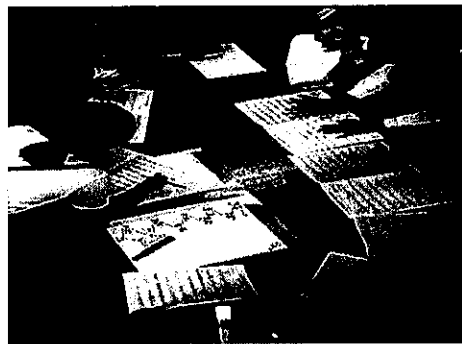


写真4 楽譜による曲の構成の可視化

2つのリズムパターンであるa・bがこの楽曲にどのように構成されているかをより簡単に理解させるために、aは青、bは緑の色を加えた楽譜を提示した。Aグループは、写真4のようにCDの聴き取りをしながら、リズムパターンの構成を理解しようとしている。子どもは旋律の流れを確認するために、楽譜に指なぞりしながら楽曲をくりかえし鑑賞していた。ここでは楽曲の構成全体がほぼ理解できた段階で、写真5のような曲の構成を示した板書を提示した。

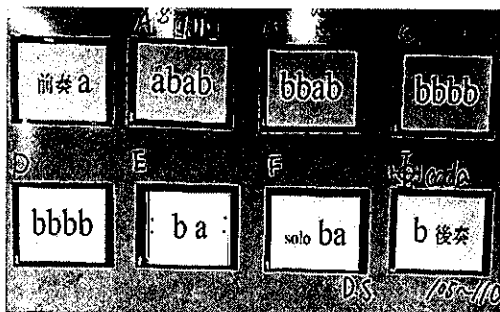


写真5 曲の構成を表した板書

写真5のように、板書で曲の構成を提示することで、a・bのリズムパターンの違いや組み合わせが比較的速く理解できるようになった。また、子どもは自動伴奏付きのオルガンを自由に使い、自分たちの技能に合った速度を自在に変えて練習することで、より早く曲の構成を理解していた。

③各グループの演奏にテーマタイトルをつけさせる。

ここでは、各グループがより思いや意図に合った演奏に近づけるために、テーマタイトルをつけさせる。そのためには、この題材のゴールである2台のドラムセットを使って演奏表現するイメージをもたせる必要があると考え、2台のドラムを使ったビッグバンドによる演奏を視聴させた。

子どもにはこの段階の過程について質問したところ次のような記述になった。

・ぼくは、この演奏を聴いて、リズムが楽しかったです。同じ曲を演奏しても全然様子がちがいました。まるでおどろような怪やかさでびっくりしました。メロディは同じだけど、演奏の仕方によって、ちがうことが分かりました。今、演奏している曲の演奏でもっとジャズっぽくリズムによって演奏できたらと思います。

(E児による感想)

・リズムが途中で大きく変わっている。ドラムのキレがすごくキレキレでカッコイイ。どんなテクニックか知りたい。2台のドラムソロの部分がすごい。ドラムのそんざい感があった。私もこんな演奏がしたいと思った。

(F児による感想)

素材としたドラムセットは、大小様々なドラムやシンバル等が組み込まれている。グループ独自の音楽的な方向性や好みに合った即興的な表現を取り入れるには最適であり多種多様な音が楽しめる。また、ドラムセットを2台使用することで、音を重ねることや分担奏、交互奏などの奏法についても試行錯誤できる。

E児による記述からは、同じ曲でも演奏表現の仕方によって、印象がまったく違うことを感じとっている。また、F児は様々な打楽器を使って演奏している2台のドラムソロの演奏を鑑賞して「キレキレでカッコいい」ととらえ、ドラムアンサンブルの醍醐味を感じ取っている。

そこで、自分たちのグループの表現のゴールをより明確にもたせたいと考え、ゴールを意識した各グループのテーマタイトルを考えさせた。ここでは、原曲の「スイングしなげりや意味ないね」のタイトルを使って「○○しなげりや意味ないね」とし、○○にはいる部分にグループの思いや表現の意図をもたせたキーワードを記すことにした。

以下は各グループで考えたテーマタイトルである。

5学年 全9グループ

- ・相手を見なきや意味がないね
- ・曲にのりなきや意味がないね
- ・そろわなきや意味がないね
- ・心を一つにしなげりや意味がないね
- ・個性を生かさなきや意味がないね
- ・楽しくしなげりや意味がないね
- ・息を合わせなきや意味がないね
- ・協力しなげりや意味がないね
- ・努力しなげりや意味がないね

表1 各グループのテーマタイトル

5年2組 A グループのテーマタイトルは、「心を一つにしなけりや意味がないね」である。タイトル設定の理由としては、「みんなが心を一つにしないと音楽が繋がらない」と述べている。A グループの学習記録には、ドラムセットを使って、図1で示した2つのリズムパターンに対するメンバーの習熟度が示されている。それによると、12名中G児1名がいずれのパターンも演奏ができない。その後、学習記録には、G児をフォローする計画が考えられていて、グループの演奏順が日ごと更新された。だが課外を利用して練習をしても、なかなかG児を含めると演奏が繋がらないという問題を抱えていた。そのような理由がタイトルには込められている。また、Bグループのテーマタイトルは、「個性を生かさなきや意味がないね」とした。この個性には2つの理由がある。1つ目は12名のメンバーの一人一人の個性を演奏で発揮させるという理由である。2つ目はドラムセットに組み込まれている様々な打楽器の個性を生かすという意味合いがある。

多田(2018)⁽¹¹⁾によると、課題・問題の探究に向かう共通認識さえあれば、意見や感覚の違いはむしろ対話を深め、他者との交流を通して新たな思考や感覚、叡智を創り出すことになること示している。また、「ずれ」を意識し生かすことにより、「対話」は深まるとある。

よって、本実践では同じ楽曲の器楽学習でありながら、各グループが設定した異なるテーマタイトルという共通認識を基にして、多様な表現により生みだされる音楽的な「ずれ」を活用する。このことから、各グループによる表現に対する論議が活発になると予想した。新学習指導要領⁽¹²⁾によると高学年の子どもは、自らの演奏のよさを客観的に判断することができるようになる傾向があると示している。ここでは、このような子どもの実態を踏まえて、互いの演奏を聴く機会を設定し、より多様な音楽に対する関心をもたせたい。
③solo/fill in 等はキメフレーズとして創意工

夫させる。

この器楽学習では単にリズムパターン演奏するだけでなく、楽曲にあったドラム演奏するために、音楽づくりの即興的に表現する要素を取り入れた奏法の工夫をさせることにした。前奏や後奏、solo・fill in 等のキメフレーズについては、楽譜に示されている音型を参考にさせた上で、自由に創意工夫させたいと考えた。



写真6 キメフレーズ部分を創意工夫する姿

パート譜の構成Fは、スネアドラムのリムの部分を使ったsoloの表現で構成されている。写真6の5年3組 C グループでは、キメフレーズ部分の表現について考えている。どのような奏法や打楽器を組み合わせで演奏することがイメージに合う表現に適しているのかを試している。だが、Cグループでは特に前奏部分についての話し合いながら表現をくりかえしていたが、なかなか思った発想にいたらなかった。

鹿毛(2007)⁽¹³⁾によると、教育実践という仕事には、事前に教育環境をデザインすることだけでなく、「現在進行形」の教育の場と学習者との間で生じている多様な関わりを臨機応変に調整することが含まれていると示している。

そこで、新しい表現への着想がなかなか定まらないCグループの子どもの状況を判断すると適切な介入が必要ではないかと考えた。

5年2組では、キメフレーズの表現がほぼ確定した段階であった。Aグループの前奏部分のキメフレーズでは、リズムの音型は変えず、打楽器の使い方を考えて音色や強弱をかえる発想をもっていた。前奏の初め3小節はスネアドラムのリムを使用し、アクセントをつけることで、そのリズムを強調したいという考えである。また、1st ドラムが2nd ドラムより強く演奏する。4小節目からは2台で原譜通りに演奏し、スネアドラムを、ffとした演奏とした前奏のキメフレーズにすると考えていた。

そこで、Cグループの子どもには5年2組のキメフレーズの表現を鑑賞させることでグループの表現の着想となるような関わりをもたせることにした。

子どもには、この段階の過程について質問したところ次のような記述になった。

- ・今日の6限に2組の演奏を聴いて、私はすばらしい演奏だなと感じました。私が一番すごいと思ったのがAグループの前奏の工夫です。オリジナルの考えがとても工夫されていて、2台の音の重なりもキレイだったし、見ているほうもとても楽しめました。(G児による感想)
- ・2組の演奏を聴いたらA・B・Cの前奏がすべてオリジナルになっていたところがいいところです。3組のCグループはまだオリジナルの前奏を考えている最中なので参考になりました。(H児による感想)
- ・セカンドドラムの前奏がグループごとに違っていて、それぞれが違う印象になっていました。わくを使ったり、シンバルにかえたりして目標に合う音楽をつくっていました。(I児による感想)

2組の演奏を鑑賞したG児は、創意工夫された前奏を聴き、ドラム2台で演奏を重ねると、どのような表現になるのかを客観的にとらえている。H児は創意工夫をした部分を重ねた演奏表現に興味をもって鑑賞することが出来た。また、自分たちの表現の工夫に参考になったようである。I児については、2台

のドラムの使い方に着目している。2nd ドラムの使い方やリム等の音色を生かすことに気付いている。さらに、表1にある各グループのテーマタイトルが音色や奏法の違いによって意識されて表現されていることから、それぞれのグループのイメージした音楽にむかっていると解釈していた。

5年3組のCグループでは、2組との関わり合う場で得たことを生かし、創意工夫する部分の表現について話し合った。それによると、前奏はリズムを変えずにタムやスネアドラムを使って演奏することで音色をかえ、オープニングにふさわしく盛り上がるような雰囲気にしたと考えた。また間奏については、前奏とは雰囲気を変え、金属系の音色でまとめることにして、すがすがしい雰囲気をねらった。間奏の構成Fのsoloの1小節目から4小節目ではハイハットを閉じて演奏し、5小節目から8小節目はスネアドラムのリムを演奏することで、金属系の音色を全面に出す表現とした。また、後奏はクラッシュシンバルとライドシンバルの使い方を工夫することで、自分たちのテーマタイトルにある「努力しなきゃ意味ないね」についての意味づけにしたいと考えた。

このように、多様な関わりを臨機応変に調整したことで、様々な楽器のもつ音色や響きの特性を生かした楽器の使い方に関付き、表現に対する着想をもつことにつながった。

(3) 第三次：聴き合う活動を取り入れ、まとめの表現をする。

①録音した演奏を視聴し、自分のグループの演奏を客観的に見つめさせる。

新学習指導要領⁽¹⁴⁾によると、コンピューターや教育機器を効果的に活用できるように指導を工夫することについて示している。

そこで、自分たちの演奏をタブレットに音を記録することで、その演奏のよさや課題、変容に気付くよう配慮した。2組のAグループでは、2回の演奏録音をして気付いたことを論議した。1回目の聴き取りでは、2つの

ことが課題に残った。1つ目は、a・bのリズムパターンの演奏のずれが目立ったこと。2つ目は、前奏部分の2台のドラムの強弱のバランスがよくないということであった。だが、キメフレーズの金属系の打楽器の表現については、納得していた。

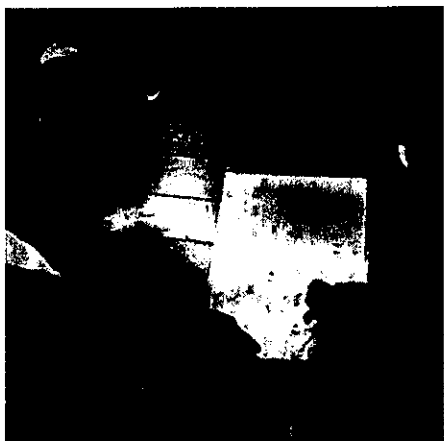


写真7 演奏の課題について議論する姿

写真7は、より表したい思いや意図に合った演奏にするために、演奏の仕方を議論している姿である。1つ目は、演奏順の変更をした。リズムパターンの演奏が遅れる人をフォローするために、もう1台のドラムで音を重ねるような配慮をしていた。2つ目は、前奏部分の2台のドラムの強弱をより意識する。2ndドラムを強く演奏し1stドラムは若干弱くするという強弱のバランスである。この2点をより意識して2回目の演奏として録音した。グループの記録によると2回目は、全体的に明るい感じにまとまり満足したとあった。ここでは、タブレットによる録音を聴きなおすことで、自らの演奏の問題点や良さを客観的に判断することができるようになった。また、自分が担当している演奏の役割についても意識することにつながり、録音を聴くことや録画を視聴して、友達の演奏の仕方を見たりすることで、楽器の適切な演奏の奏法などが身についてきた。この過程を得て子どもはまとめの表現にはいった。

3. 本研究の実践にかかわる検証の実際

指導の実際として取り上げた題材にかかわる授業後アンケートの実際を示す。

(1) 検証の実際

①子どもアンケートより

本実践の検証は、5年112名による結果を取り上げる。また本実践終了後、以下に示す質問によるアンケートを実施した。

1. この学習では、ドラムの使い方を工夫してキメフレーズを考えました。学習してわかったことを書きましょう。

子どもの回答には大きく分けて3点についての記述があった。

1点目は、「キメフレーズを取り入れることで、グループの個性が出せた」「いろいろなキメフレーズがあって、各グループの違いが表現された」などがあった。各グループではキメフレーズをつくる過程において、このような音楽をつくりたいという考えをもった。また、そのつくった音楽を全体で聴き合うことで、それぞれの表現の違いやよさを認めあつたことが考えられる。

2点目は、「ドラム1台でも、その中にある一つ一つの打楽器の特徴やよさを知ることができた」「リムをたたくことなど楽器の組み合わせを考えることができた」などがあった。子どもは自分たちが表したい音の響きを試しながら探したことで発想が広がり、よりよい表現を探ることができたと考えられる。

3点目は、「キメフレーズを考えるために、音を一つ一つ聴いてきたので音楽を聴く力がついたかなと思う」などの回答が多くあった。

キメフレーズをつくる過程において、まとまりを意識した音楽にするために、自分や友達が発する音を注意深く聴く経験を積み重ねたことから感じたのだと思われる。

2. この学習では、12~13人のグループで協働学習をしましたが、グループで取り組むよさやおもしろさなどを書きましょう。

子どもの回答は大きく分けて2つであった。1つ目は「一人じゃ出来ないことをみんなだとスムーズにできるし、思いもしなかった意見もでる」「ドラムができない人や苦手な人をみんなでサポートできることで心と心がつながる」など協働学習のよさについての記述であった。2つ目は「仲間割れで泣く人も出てきて…」「意見がぶつかったり、いやなこともあった」など協働学習がスムーズに進めていけないという活動の困難さについての記述であった。

J児の記述によると「2台のドラムを2人で演奏すると、相手のことも考えて演奏しなくてはならないので、1人より大変」とあったが、後半にはこの難しさをこえることができたのはリーダーの存在などがあり、たくさん考えをまとめてくれたことに感謝している」という記述や「友達との意見の食い違いでけんかをしたけどこの学習を通じてお互いのことが思いやれるようになった」などという心の変容や成長が見られた。この質問からは、圧倒的に友達と気持ちを合わせて音楽表現を楽しむことの意義について記述されていた。

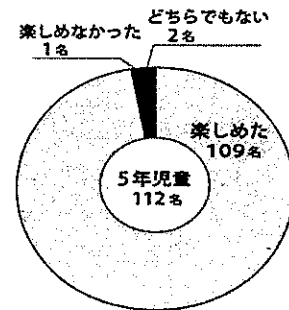
3. まとめの表現を聴き合う会で印象に残ったことを書きましょう。

子どもの回答には大きく分けて2つあった。1つ目は、聴き合う会では同じ曲を9回聴く機会があったが、それぞれの演奏が違い、各グループのキメフレーズがおもしろくアレンジされていることや各グループのめあてが上手く表現されていたということが挙げられた。

2つ目は、聴き合う会は自分のグループの練習の成果を出すことできることや他のグループの演奏をみることで、自分のグループの良さやおもしろさに気付くということが挙げられていた。

4. 「スイングしなけりゃ意味ないね」を演奏したこの学習は楽しめましたか？楽し

めた()・楽しめなかった()・どちらでもない() ○をつけましょう。またわけも書きましょう。



子どもの回答では、97%の子どもがこの学習が楽しめたとあった。楽しめた理由としては、大きく分けて3つあった。1つ目はドラムが叩けるようになったこと。2つ目はアレンジを考えたこと。3つ目はグループで協力して一つのものをつくりあげたときの達成感などがあった。

多田(2018)⁽¹⁶⁾によると、学習者が学びの場で「楽しさ」を感得するのは自分の発想や気づきなどを表現できたときや自己の成長が自覚できたとき、さらに仲間と共に深い学びができたときであり、次々と思考が深まる知的興奮を体験できたときと述べている。

子どもの回答にあるように、97%の子どもが本実践を楽しめたのは、魅力ある学習材であるドラムセットを使って、仲間と共に思う存分音楽に浸り、音楽活動の楽しさを実感させることができたことにある。

このように、子どもにとっては図1のドラムパターンの定着に始まり、協働学習を経てアレンジを加えてまとめの演奏に至るまで、粘り強く見通しをもって取り組むことができた。このことから、子どもにとってわくわくしながら楽しんで臨める学習材の選択や子どもの実態に応じた器楽学習の方策を考えていくことが大切だと感じた。

おわりに

本研究の成果は、学習材としてドラムセットを使用することで、多様な器楽学習を展開できたことである。特に第二次において提示した2つのリズムパターンをもとに、友だちと協働しながら、音楽表現を生み出すという過程を設定したことがあげられる。ここでは、友だちのアレンジや演奏に対する考え方や感じ方の違いを感知して、自分の考えや表現と比較できる力を得ることにつながったことも成果である。また、本題材でスイングジャズスタイルの「スイングしなきゃ意味ないね」の楽曲を教材として使用したことについてのアンケートでは、「明るく楽しい」「ノリがよくてうきうきした気分になる」などの回答が多かった。第一次の体を動かす活動を得て、楽曲から感じたことをイメージし、イラストで描く活動においても、絵1・2のように身体が揺れ出すようなうきうきした雰囲気イラストが多く描かれていた。

河瀬(2020)⁽¹⁰⁾によると、グルーブという言葉は音楽を聴いて身体を動かしたくなる感覚という定義が多くみられるとある。またグルーブの特徴の一つに、身体を動かしたくなる感覚と同時に楽しさと呼び起こすことがあると述べている。またこのことは、ドラムのリズムパターンを使った実験でも同様であり、身体を動かしたくなる感覚と楽しさは関係していると示している。このように、教材としたスイングジャズスタイルの楽曲には、音楽を聴いて身体を動かしたくなるグルーブやスイングという感覚があり、曲のもつ特徴をより生かした楽曲を教材として扱うことで、子どもは学習をより楽しむことができ、子ども同士の協働的活動がさらに活発になるのである。また合奏を取り入れることは、音楽活動ならではの高い協調の維持のために、より子ども同士の細やかなコミュニケーションが行われることに教育的意義があると考えられる。今後も子ども同士の音楽的コミュニケーションの深部に豊かな通じ合い、響き合いをもたらしてくれる器楽学習の開発を継続していきたい。

注；引用文献

- (1)中央教育審議会(2016)「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申)」
- (2)文部科学省(2017)『学習指導要領』より第3章第3節第5学年及び第6学年の目標と内容より引用する。
- (3)多田孝志(2018)「対話型授業の理論と実践深い思考を生起させる12の要件」教育出版より引用する
- (4)徳田典子(2018)「よりよい未来を志向する～未来へ生かす決める～」『第69回教育研究発表会要項』金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校要項 pp.75-78
- (5)(2)同上 pp.125
- (6)本実践で引用した写真及び感想は、すべて金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校5年生によるものである。「器楽の活動」の過程における子どもの学びのようすとして、写真・ワークシートの感想を引用する。
- (7)(1)同上 pp.125
- (8)本実践で引用したイラストは、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校5年生によるものである。「器楽の活動」の過程における子どもの学びのようすとして、A, B児のイラストを引用する。
- (9)小島律子(1999)「思考と表現の統合をもたらす『音楽づくり』の方法原理と教育的意義一デューイ『オキュペーション』概念を手がかりに『大阪教育大学紀要 第V部門：教科教育』
- (10)(2)同上 pp.99-97
- (11)(3)同上 pp.73-76
- (12)(2)同上 pp.98-99
- (13)鹿毛雅治(2013)「学習意欲の理論」金子書房より引用する。
- (14)(2)同上 pp.125-126
- (15)多田孝志(2017)「対話的学びを創る」共創型対話が習研究所 那須塩原研修会 資料③より引用する

(16)河瀬諭(2020)「連載音楽と身体の動きの科学より2.グルーブ」ヤマハ音楽研究所より引用する。

参考文献等

- ・ 寺沢千秋(2018)研究紀要第97号『小学校における「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニングの視点)の実現に向けた授業改善」について』一般財団法人 教育調査研究所
- ・ ジェニ&レスリー(2004)『「考える力」はこうしてつける』新評論
- ・ 河瀬諭(2004)『合奏における演奏者間コミュニケーション・タイミング調整とその手がかり』
- ・ 糸島市立東風小学校『平成30年度研究成果報告書』
- ・ ミュージックエイト社 器楽合奏譜《スイングしなきや意味ないね》

Instrumental Music Education in Elementary Schools

— Use of Drums —

by

Hideo SHINOHARA, Noriko TOKUDA

This exercise is aimed at encouraging students to use musical instruments – in this case drums – to identify, understand and match rhythms to swing jazz-style music.

- 1 Divide class into groups of 12 people, with each group assigned one drum set. While listening to the music, group members should work out among themselves how to use and who uses each part of the drum set to best match the rhythm of the music.
- 2 Then, each group should, in turn, perform their drum routines in accompaniment to the music in front of other groups
- 3 After each group has performed, the class should engage in a teacher-led discussion to compare and assess the different rhythm styles, interpretations and arrangements.

Keywords: instrumental music education / drum set / collaborative learning / swing jazz-style / significance of education